幕末創世記

黒船来航

1

邦光史郎

徳間文庫

徳間文庫

幕末創世記(ばくまつそうせいき) 1

《黒船来航》

© Shirô Kunimitsu 1989

く-1-43

著者　邦光史郎(くにみつしろう)
発行者　荒井修(あらいおさむ)
発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四―一〇〒一〇五
電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替　東京四―四四三九二番
印刷　凸版印刷株式会社
製本
〈編集担当　吉川和利〉

1989年7月15日　初刷

ISBN4-19-568809-4（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

江苏工业学院图书馆
藏书章

幕末創世記 1

《黒船来航》

邦光史郎

徳間書店

目次

閉ざされた東洋　5
指月城　62
白面の書生　117
順風逆風　174
黒船来航　230
猛士、　309
海鳴りの時　368
異人たち　425

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

閉ざされた東洋

1

ロンドンを船出したテイ・クリッパー（中国茶を運ぶ快速帆船）が、約五カ月の航海を終えて、ようやく澳門（マカオ）へたどり着いた時、ハリー・パークスは、水夫の背に負われて下船しなければならないほど、すっかり衰弱しきっていた。

「坊や、あれが、あんたのお城だよ」

水夫は広い肩を揺り上げて、ハリー少年の閉じた瞼（まぶた）を開かせようとした。

本船にいた時は、さほどに思わなかったけれど、こうして小さなボートに移乗してみると、港はかなり波立っていて、うねりが高い。

その波頭の向こうに緑の島影が揺れ、海岸線に並ぶ白い館（やかた）の群れが、まるで遠くに浮かぶ蜃気楼（しんきろう）のごとくぼんやりと映り、それはすぐ砕け散る波のしぶきにぼかされて、ハリーはまたし

ても激しい嘔吐感に悩まされた。

――吐くものなど、もう何も残ってやしないのに……。

少年は呪わし気に呟いた。すると、自分の胃袋は、きっとイングランドへ帰りたがって、こんな手ひどい抵抗を試みているのだろうという思いがよぎった。

――だけど、もう駄目なんだ。みんな死んじまって、僕に残された親族は、この澳門に住んでいるチャールス小父さんだけなんだもの。

だがその人は、従姉のハズバンドであるにすぎない。けれどハリーは、その薄い縁を頼る以外にしかたのない身の上となってしまった。

目をとじると、夕陽の街道を駆けて行く馬車の鈴音が聞こえてくるようだった。そしてその馭者台には、元気だった頃の祖父がどっしりと腰を下している。

〝お爺さん、どうして夕陽に向かって旅をするの〟

問いかけると、祖父は、煙草の匂いのしみた濃い髭をもぐもぐさせた。

〝坊や、西へ向かって旅立つと、すこしでも長生きできるからだよ〟

その時、祖父はすでに迫りくる死の予兆を恐らく感じ取っていたのだろう。

――みんないつかは死んで行かなきゃならないんだ。

馬車に揺られつつ、ハリーはこれからはじまるだろう旅の愁いに身を委ねていた。

「さア着いたぞ坊や！」

鉄の爪のように硬い水夫の指先が、少年のやつれきった身体を、自分の背中から引き剝がそうとした。

目を開くと、波止場に群れ集っている異相異形の男女たちが、名も知れぬ小鳥の囀りのように甲高い声を上げて、今上陸しようとする紅毛人たちを見物している。

――まるでサーカスの一座が着いたようだ。

にわかに熱気が彼らを押し包んだ。

「これが澳門なの……」

少年は怯えた声を放った。

「そうさ、これがわれわれ白人のお城だ」

けれど少年の目に映った波止場は、黒や麻色の短い上衣に、同色のだぶだぶしたズボンを穿いた、黒髪黄色の膚をもつ中国人たちによって埋めつくされている。

「さあ下りなよ。モンテの砦で、ポルトガル兵たちが歓迎の大砲を射ってくれることだろう」

水夫たちは、路傍に佇んだり榕樹の木蔭に坐り込んだりしている東洋人たちを、まるで足許に群がる猿の群れを視るように、傲然と見下している。

――これがあの美しい島の住民たちなのだろうか。

立ちながら西瓜を齧って種子を吐き散らしている男たち、ぶんぶんとび廻る蠅が赤児の顔に群がりたかっているのに追い払いもせず、裸の子供が他人の足許に向かって小便をとばしてい

るのに、それを叱ろうともしない母親や、弁髪を垂らしながら、水夫の捨てた煙草を群がり争って奪い合っている大人や子供たち、それらはどう見ても未開の国の粗野としか思えなかった。

――なんてひどい所なんだろう。

それにこの暑さはどうだろう。風も土もからからに乾ききって、しかもべっとりと塩分を沁み込ませたように暑い。汗が、全身から噴き出して、たらたらと眉にしたたり、眼が痛んでならない。ハリー・パークスは、いつか船酔いより、炎熱を苦痛としている自分の変化に気づいた。

――なるほど、船酔いの妙薬は大地を踏むことだと聞いていたけど、こんどはこの暑さを防ぐ妙薬を教えてもらわなきゃいけないな……。

五カ月にわたる苦痛の航海は、ハリー少年に衰弱を与えたばかりでなく、計り知れないほど多くの知恵をも与えてくれたようである。

とにかく彼は、自分ひとりの才覚で、この広い世界を渡って行かなくてはならないのだ。

――これからは、一日も早くここの生活に慣れなきゃいけないぞ。

ハリーは、赤い煉瓦を積み上げたばかりの茅屋が、うすぐらい室内をのぞかせている海岸通りの中国人街を眺めやった。

大きな竹籠に、海老や蟹や名も知れない魚たちが山積みされて路傍に並べられ、その死魚の腐臭を慕って、蠅たちがぶんぶんとび廻っている。だが中国人たちはその悪臭をさして苦痛と

していないようだった。

——正しく未開国だ。

ハリーたちの一行は、石造りの家々が建ち並ぶ港町をくぐり抜け、やがて爪先上がりに島の中央部へとつづいて行く石畳道にさしかかった。

「坊や、お前の小父さんは偉い牧師さんなんだってな」

「ええ、イギリス政府の主席通訳です」

ハリーは胸を張ってそう答えた。

「そうかい、この東洋じゃ、牧師さんは、みんな通訳兼スパイをしているよ」

「いいえ、チャールス小父さんは中国学者なんです」

「学者か……。中国語を覚えさえすりゃ、みんな学者だよ」

水夫たちは高声を上げて笑い合っている。

だが、ハリーは、この異境にあっても紳士でありたいと願っていた。

——この水夫たちに小父さんの志がわかってたまるものか。

けれど、ハリー・パークスが、これから頼って行こうとするチャールス・グッラフは、〝山師〟と仇名されていた。

一八三〇年代、まだ香港は無名の海賊島にすぎず、上海もまた開港の運びに至らず、当時最大の貿易港となっていたのは、中国人がオーモンと呼んでいる澳門、そして広東の二港であっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。そのため一攫千金を夢見る紅毛の山師たちが、この澳門に群れ集まってとぐろを巻いていた。

ところでドイツ生まれのイギリス人チャールス・グッラフは、あまりにも野心がありすぎた。彼は、アメリカ海外宣教団の布教師となってこの澳門へやってくると、たちまち中国語をマスターして、新約聖書の中国語訳に成功した。

そこでイギリス政府は、当時中国学の最高権威者であったロバート・モリソン博士に次ぐものと認めて、チャールスを、商務庁の主席通訳に任じて、中国大陸侵略の水先案内人にしようとした。

彼らヨーロッパ人は、これから侵略しようとする国に、まず宣教師を送り込んで情報の蒐集と宣伝に当たらせ、次に商人を派遣して交易に名を借りた経済侵略を策し、さて最後に軍艦が現われて完全に征服を完了するという三段構えの植民地獲得戦略を用いている。

そのよい例がイギリスのインド支配である。当時いち早く産業革命を為し遂げて資本主義国化していたイギリスは、七つの海を支配してインドに至り、そのインドから取り立てた税金と綿花を使って大量の綿布を生産した。ところが生産が増大すれば、その売先が必要となってくる。そこで目をつけたのが、四億の厖大な人口を抱えている中国大陸であった。

イギリスは、他国と争って中国茶を買いつけていたけれど、その輸入代金を、過剰生産になっていた綿布を売りつけることによって相殺しようとした。

ところが、いくら人のよい北京政府だってそうは思い通りになってくれない。そのため、イギリス人が考えついたことは、インド特産の阿片を中国人に売りつけて、彼らを骨抜きにしてしまうことだった。

阿片の害毒の恐ろしさは、誰よりもよくイギリス人が知っている。だからイギリス本国では阿片の持込みを国法によって固く禁じている。けれど東洋人に売りつけることは一向に構わないとばかり、牧師たちを麻薬売込みの手先に使っていた。

大体、他人の国へずかずかと踏み込んできて、お前たちの宗教は異教であるからキリスト教に改宗しろと迫ることさえ怪しからぬ神の押しつけであるにも拘わらず、こんどは麻薬の押売りを強行しようというのである。

こうして起こったのが、後の阿片戦争であった。

だが、イギリス政府の高等スパイであるチャールス・グッラフは、中国よりも、まだ極東に位置している金銀の島日本により深い興味を抱いていた。

2

マルコ・ポーロの東遊以来、日本は、黄金の島として印象され、ケンペルの〝日本史〟（一七二七年刊）や、シーボルトの〝日本〟（一八三二年刊）によって、ようやく日本研究の機運が起

こりつつあったとは言え、彼らヨーロッパ人にとって、この鎖国された極東の島国日本は、まだまだ神秘の帷に閉ざされた未知の国でしかなかった。

――だから、その神秘なる処女性を、儂が、この手で押し披いてみせてやる。

そうすれば、チャールス・グッラフの名声は、ロバート・モリソンを遥かに凌駕して、彼の名は必ず歴史の一ページに長く記録されることだろう。

チャールスは、日蔭になったバルコンに憩っていた。

目を上げると、紺青の空と紺碧の海がある。

そしてこの邸には、日本渡航の名目となるべき七人の日本人漂流者たちが養われていた。彼らは、大君に捧げる貴重な手土産なのだ。

これですべて日本探検の準備はととのった。この後は、日本へ渡航する船主をみつけさえすればよい。そうすれば金銀の島を思うままに料理できる。

――だが、それにしても、この澳門の炎熱は、ともすると勇気あるイギリス人を、怠惰に変えてしまいやすい。

チャールスは、午睡の時をすごしている静かな邸内の気配に耳を傾けようとした。

――みんな今のうちにたっぷり休養を摂っておくがよい。

それにしても、ハリー少年は午睡もせずに部屋を抜け出して何をしているのだろう。

彼は、ハリーに対して一つの夢をもっていた。それは、剛毅なる精神と強健なる肉体を併せ

もつイギリス少年を、自分の後継者に仕立て上げることだった。

――だが、あの子は、思ったより脾弱すぎるようだ。

それだけがわずかな不満であった。

どこからか胡弓を弾いているらしい音色が流れてきた。けだるく単調なリズムであった。

ハリー・パークスは、日本人漂流者たちが寝起きしている小さな茅屋を覗き見た。外見上、彼らは中国人たちとよく似ている。けれど、中国人のように楽天的ではなかった。深い皺をその陽灼けした顔面に刻み込んで、どこか悲劇的な印象を漂わせている。

壁に取りつけられた木製の三段ベッドに横たわっていた彼らの一人が、ゆっくり頭を擡げてハリーを瞪め直した。

「カム・ヒヤァ……」

男は、口ごもった発音でそう呼びかけた。

一歩、室内へ入りかけて、ハリーは、あわてて背を向けた。

――なぜ……。彼らが奴隷だから自分は入ることをためらったのだろうか。

ハリーは、まだ東洋人にすこしも馴染めなかった。この澳門へきて、もう十日も経つというのに、邸内からまだ一度も外へ出たことがなかった。

今、彼は、その禁断の門をくぐり抜けようとした。

夾竹桃が、丈高く生い茂っていた。風のない午後であった。音もなく赤犬がすり寄ってき

た。まだ成犬とはいえないやせたからだに、肋骨が浮き上がっている。インド人のボーイの話によると、その犬は十日ほど前にこの邸へ迷い込んできて、いくら追っても出て行こうとしないのだそうである。

「ドーラ……」

ハリーは手をさし伸べた。中国風に〝竜号〟と名づけたけれど、彼は愛情をこめて〝ドーラ〟と呼ぶことにしていた。ドーラは、ハリーに従って坂道を下りて行った。

どこからか、不思議な音色が聞こえてくる。バイオリンのようであってもっと東洋的な音色であった。むせび泣く女声に似て甲高く、あるいは嫋々と流れるようにひめやかでもある。

――ここだな。

赤煉瓦の壁の上に、鎧窓が穿たれて、音色はそのあたりから、どこまでも青く晴れ渡った虚空に向かって流れ出ている。しばらく佇んで眺めていると、そのおぐらい窓に人影がゆらめき出てきた。

白く可憐な面輪の少女であった。彼女は、はかなげに細い首を傾げて、路上を眺めやろうとしている。

ドーラが、二声、三声吠え立てた。

「ドーラ！」

急いでハリーは犬を制した。少女は、怯えたように首をすくめている。

「すみません、何しろ行儀の悪い犬でして……」
思わずハリーは英語でそう言った。すると、少女は、
「いいえ、構わないんです。私、犬は大好きなんです」
やや訛のある英語で答えた。
「あなたは、英語がお上手なんですね！」
ハリーは、思いがけない事実に、すっかり昂奮してしまっていた。
「ええ、ほんのすこしだけ……。でも、その犬は、英語が話せないようね」
「そうなんです。何しろ〝竜号〟ですから……」
「どんな犬だか、見たいわ」
「下りてらっしゃいよ。ドーラは、咬みついたりしませんから……」
それは心からの誘いであった。もう何日間も、いや何十日もの間、このようにやさしい女性と会話を交したことがなかった。まるであの人は、隣家のマーガレットのようだ。ハリーは胸が弾んでいた。
けれど、少女は、なかなか姿を現わさない。気が変わって、もう下りてこないのだろうかと心が萎えた。
突然、木製の白い扉が、かたりと鳴った。振り返ると、そこに赤い旗袍をまとった少女が佇んでいた。年齢はよくわからない。小柄でほっそりとしたからだ、きれいに編んだ長い髪、夕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com